

現場で痛感した、「備え」の大切さ。

被災地で目にしたのは、医療だけでは解決できない現実でした。倒壊した家屋、渋滞で身動きの取れない道路、そして医療を必要としながらも情報が届かずにいる方々。患者搬送から避難者の健康確認、貯水槽の水質調査、診療所の物資状況の把握まで、私たちは「求められることは何でもやる」という姿勢で動き続けました。

現場で痛感したのは、正確な情報こそが命を救うということです。どこに患者がいるか、どの医療機関が動いているか——情報がなければ、支援は届きません。災害対応は、まさに「情報戦」です。

そして、もう一つ強く感じたことがあります。それは、日頃の備えが、いざという時の明暗を分けるということです。

普段飲んでいるお薬の情報をお薬手帳で携帯すること、家族との連絡方法や集合場所を事前に決めておくこと——こうした小さな備えが、災害時に命を守る大きな力になります。

私たちは、これからも訓練を重ね、皆さんの命を守るために備え続けます。どうか皆さんも、「自分には関係ない」ではなく、今日からできる、備えを始めてください。

新行橋病院
副院長 兼 救命救急部 部長
日本 DMAT 隊員
田中 宏典 医師

被災地へ、行橋から。 - 新行橋病院 DMAT が支援に出動しました -

DMAT（災害派遣医療チーム）とは、大規模災害が発生した際にいち早く被災地へ駆けつける、専門的な訓練を受けた医療チームです。新行橋病院にも、本来の業務と並行しながら有事に備える DMAT チームがあります。熊本地震の被災地へ派遣された田中宏典医師に、活動報告と、私たちにできる備えについて聞きました。



※撮影時 1 人研修のため不在

活動報告 新行橋病院 DMAT が現地で行った主な活動をご紹介します

MISSION 1 患者搬送

被災地の医療機関と連携し、治療が必要な患者を安全に医療機関へ搬送しました。道路状況の確認や安全面の確保など、迅速かつ慎重な対応を行いました。



MISSION 2 避難所スクリーニング

避難所を訪問し、避難者の健康状態を確認しました。体調不良の早期発見や、必要な医療へのつなぎを行い、安心できる避難生活を支えました。



MISSION 3 貯水槽調査

避難所や医療機関の断水の原因を調査し、貯水槽の不具合を解消しました。衛生環境の確保は感染症予防のために欠かせない重要な活動です。



MISSION 4 診療所スクリーニング

地域の診療所を訪問し、医療機能や物資の状況を確認しました。医療ニーズの把握と、必要な支援につなげるための情報収集を行いました。



地域を守る拠点がある。

大規模な災害が発生したとき、地域の医療はどうなるのでしょうか。

新行橋病院は国が指定する「災害拠点病院」として、災害時に地域医療の中心的な役割を担います。非常用電源や最低 3 日分の食料・医薬品を常備し、ライフラインが途絶えた状況でも医療機能を維持できる体制を整えています。重症患者の受け入れには手術室や人工呼吸器の台数など物理的な限りがあります。想定を超える大規模災害の際には、

「EMIS（広域災害救急医療情報システム）」を活用して北九州市など域外の病院とリアルタイムで連携し、広域搬送の調整も行います。

また、災害拠点病院には DMAT チームの設置が要件の一つとなっており、平時から月 1 回の委員会開催や年 1 回の九州ブロック災害訓練への参加など、有事に備えた準備を積み重ねています。地域の皆さんの命を守るために、新行橋病院は今日も備え続けています。

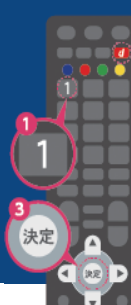
LINEで
友だちになろう!

@lineofficial
友だち登録やお知らせの受信をGET!



市の防災情報を受信するのは LINE が便利。友だち登録をすると、受信する情報を「防災」「イベント」「健康」など、興味がある分野で自由に選ぶことができます。

LINE 友だち追加



kbc1ch+@ボタン

- 1 テレビのチャンネルを KBC (1ch) に合わせます。
- 2 リモコンの「d ボタン」を押します。
- 3 「d ボタン」広報紙を選び、「決定ボタン」を押して防災情報を確認。

※ お使いのリモコンによりボタンの位置は異なります。